

石のぼうし

感王寺 美智子

「じいちゃんはな、こーんな大きな船さ、乗ってな、ずーっと遠い国まで、行ってただ」

オサム君のおばあちゃんは、背中をのけぞらせ、両手を左右いっぱい広げながら、おじいちゃんの話します。広げすぎて、時々、後ろに、ひっくりかえりそうになります。

「ほんでな、こーんなでつけえ魚さ、とってな、こーんないっぺえ、積んできたのさ」

おばあちゃんの家は、キラキラと輝く海が見える、小高い丘の上にあります。オサム君は、ここから、港を出て行く船や、群れ飛ぶカモメを、ながめるのが大好きです。

オサム君は、おじいちゃんに会ったことはありません。オサム君が生まれる、ずっと前、大きな津波が来て、船と一緒に、天国へ行ってしまったそうです。写真も流されてしまっ

たので、顔もわかりません。

ときどき、こうして、おばあちゃんの話聞いて、大きな船に乗って、大きな魚をつかまえる、おじいちゃんのを想像します。

きつと、真っ黒に日焼けしているのだろうな。ヒゲは、あるのかな。

「おじいちゃんと、会ってみたかったな」

「会いてえか？なら、会いに行ってみっぺか？」

おばあちゃんは、オサム君の顔を、のぞきこみました。

「え？会えるの？どこにいるの？」

オサム君は、キョトンとしました。

「なんもさ、すぐ、そこだ」

おばあちゃんは、ニツコリして、丘を見おろし、指をさしました。

「ほら、あそこだ。あそこで、石のぼうしさ、かぶってるっちゃ」

おばあちゃんの家の下には、畑があって、その先には、小さな家がいくつかあって、そ

のまた先には、原っぱがあつて、そのまた先には、墓地があります。墓地の先には、また原っぱがあつて、そのまた先には、また畑があつて、そのまた先には、また小さな家がいくつかあつて、そして、ふもとは、オサム君が通う小学校があります。小学校の先には、松林が広がっていて、キラキラと輝く海に、続いていきます。

おばあちゃんは、坂と平行に、指を、さしているのです、そのどこなのか、よくわかりません。

おばあちゃんは、庭に咲いていた花を、5つ、6つ、選んでつむと、スタスタと、丘をくだりはじめました。おばあちゃんは、毎日、この丘を、あがつたり、おりたりしているのです、足腰が、じょうぶです。オサム君は、おばあちゃんの後を、ついて行きました。

オサム君が、お父さんとお母さんと暮らす家は、この丘の、海と反対側のふもとにあります。小学校への通学路は、丘のふもとをぐ

るりとまわって行きます。ゆるやかで、ほそ
うされた道です。だから、この海側の急な坂
を歩いたことはありません。

おばあちゃんは、畑をくだり、小さな家を
いくつか横目で見て、原っぱをくだり、墓地
で足を止めました。そしてお墓が並ぶ中へ、
入って行き、ちようど、墓地の真ん中あたり
の、黒いピカピカしたお墓の前で立ちどまり
ました。

「オサム、ほら、じいちゃんだ。ほら、きれ
いな石のぼうしさ、かぶってるべ。オラが、
毎日、みがいてっからな」

おばあちゃんは、首にかけていた手ぬぐい
で、墓石を、キュツキュと、みがきはじめま
した。

「ほら、なんて言うんだ？昔の英国紳士が、
かぶっていたぼうしさ。真っ黒な筒みてえな
帽子さ」

おじいちゃんの黒い石のお墓は、確かに、
つやのいいシルクハットみたいです。

「おじいちゃん、孫のオサムが、会いに来ましたよ。大きくなったっちゃ。前来たときは、桃みてえな、ちっこい赤子だったもんな。大きくなつたべ」

おばあちゃんは、手にもっていた花を、そつとお墓にそえ、手を合わせました。

オサム君も、おばあちゃんの横に並び、手を合わせました。

オサム君は、お墓は、みんな同じ四角いかたちと思っていきました。けれど、こうして見渡してみると、いろいろな形があるものです。

円形のもの、平べったいもの、ひよろ長いもの、なんだかわからないもの。言われてみれば、みんな、いろいろなぼうしをかぶっているように見えます。

おじいちゃんの右どなりのお墓は、まんまるなぼうしを、かぶっています。いえ、かぶっているというより、乗せています。今にも、転がり落ちそうで、ちよつと、こわいです。

「こん人は、じいちゃんと同じマグロ船に、

乗っと思った。野球が好きでの。中学校の時は、
県大会の決勝まで行っただ。だから、息子さ
んが、野球のボールに見立てたぼうしさ、つ
くって、乗せてやったのさ」

でも、それは、野球のボールにしては、か
なり大きくて、まるで、ボールをまわしてい
るアシカのように見えます。

「ハハ、んだな。学校ときは、校庭さ、か
け回ってたども、船に乗ってからは、投げた
り、打ったり、できんかっただろうからな。
しかたなく、船の上で、鼻の頭さ、ボール乗
つけて、グルグルやっと思ったのかもしれねえ
な」

おばあちゃんは、ゲラゲラ笑いました。

「ここん墓は、みんな、海の方を見て立って
いるべ。ここの者たちは、海を見守っていて
くれてるっちゃ。海の番人だっちゃ」

おばあちゃんは、今度は、海の方を向いて、
手を合わせました。

その時です。

おじいちゃんのぼうしに、キヨロキヨロツと動く、二つの目が、浮かびあがりました。そして、その目は、オサム君の顔を、しばらく、じいっと見ると、への字になつて、ニコツとしました。

「ばあちゃんとじいちゃんの家は、昔は、あの海の前の松林のところにあつたのさ。じいちゃんが、いっぺえ魚さとして、りっぱな家さ、建ててくれたばっかりのことだった。だけど、大きな津波が来て、あつという間に流されちまつた。残つたのは、家の土台だけだった。まわりの家も、みんな、なくなった。何もかんも、なくなった。何もかんもなくなつたら、涙もなかった。涙も出んで、あれ、おらんとこの家は、こんなに海さ、近かつたか、ただ、そう思った」

おばあちゃんが、おじいちゃんの墓の方を振り向くと同時に、おじいちゃんの目は、ズツと消えてしまいました。

オサム君は、何度も、目をこすってみまし

た。けれど、もう何も見えませんでした。

※

翌日、オサム君は、学校が終わると、お墓がある道から、帰ってみようと思いました。

昨日、おじいさんの石のぼうしに写った目を、確かめたかったです。

校庭に出て、裏口を出ると、真っ直ぐ丘を上がる、細い、でこぼこ道がありました。

歩いてみると、急な坂は、少しきついけれど、振り返るたびに、見渡す景色が、どんどん広がってきて、きれいです。

それに、思ったより早く、お墓に着きました。もしかしたら、丘のすそを、ぐるっとまわる、いつもの通学路より、こっちの方が、近道かも、しれませんが、車も通らないので、安全です。

おじいちゃんの、シルクハットのような石のぼうしは、少し遠くから見ると、しゃっきっとして、本当に、英国紳士みたいです、

「おじいちゃん、また来たよ」

オサム君は、来る途中の原っぱでつんだ花を、おじいちゃんに、そなえました。

すると、ふわふわっ、と風が吹いて、声が聞こえました。

「ありがとうございます」

オサム君は、おどろいて、まわりを見渡しましたが、誰もいません。

「よく来たな」

声は、目の前の、おじいちゃんのお墓から聞こえています。

シルクハットみたいな石のぼうしを、じつと見ると、昨日と同じ、ふたつのやさしい目が浮びあがってきました。

「おじいちゃん？」

おじいちゃんは、優しい二つの目を、への字にして、ニツコリと、笑いました。

すると、今度は、右どなりの墓から声がしました。

「おい、ぼうず」

まるいぼうしのお墓です。

「ぼうず、アシカで悪かったな」

まるいぼうしに、まるい口が浮かび上がって、動きました。

「だども、まったくだ。オラが、いくら野球が好きだったからって、このぼうしは、ないべさ。それに、これは、野球のボールにしては、デカすぎる。おまけに重てえ。こりや、アシカというより、ボーリングだべ」

オサム君は、びっくりして、尻もちをつきました。

「オラの息子はさ、ボーリングが好きなのさ。だから、きつと、自分が死んで、墓に入るとき、この帽子に、穴を3つ開けて、ボーリングの球にするつもりだったちゃ」

すると、今度は、左どなりの墓に口が浮かび上がり、しゃべりだしました。

「いいじゃねえか。特注のぼうしさ、こさえてもらって、しよっちゆう家族がやってきて

くれて、花だの、だんごだの、そなえてくれる。ぼうしだって、ピカピカに洗ってくれる。それに比べて、ほら、オラのこの苔だらけのぼうしを見てみる」

左どなりの石のぼうしは、古くて、緑の苔でおおわれています。

「もう何年も、何十年も、誰も来てくれねえのさ。あわれなもんだ、さびしいもんだ」

その苔だらけのぼうしの上には、大きくて真っ白な石のカエルが、乗っかっています。

「このカエルはさ、大津波が、着た後に、オラの頭に、ぴよーんと、飛び乗ってきて、そのまんま、石になっちゃった。それから、ずーっと、オラの頭の上で、オラと一緒に、じーっと海さ見てるだ」

オサム君は、何度も、自分のホッペタを叩いてみました。

おじいちゃんは、おだやかな目で、言いました。

「オサムや、聞こえるか？じいちゃんたちは

な、ここで、こうして、海を見守っている。
オラたち、海の男は、死んでもしばらくは、
次の世代を見守る役目がある。特に、じいち
やんたちみたいは、津波にあつた人間は、こ
れからの人が、同じ目に合わんように、伝え
る役目があるのだ」

おじいさんの目が、動くほうを見ると、墓
の隅に、小さな古ぼけた石碑が建っていました。
た。

近寄ってみると、そこには、

「ここより高いところへ逃げなさい」
と、刻まれていました。

両どなりの石のぼうしたちが、おしゃべり
をするときは、口が浮かび上がってきますが、
おじいちゃんの石のぼうしには、目だけが浮
かんできます。でも、オサム君には、おじい
ちゃんの声が、ちゃんと聞こえます。

おばあちゃんが、おじいちゃんのことを、
おだやかな目をした無口な人じやった、と言

っていたことを、思い出しました。

おじいちゃんは、生きているときから、こうして、まなざしで、話す人だったのでしよう。

※

それから毎日、オサム君は、学校が終わると、校庭の裏口から、丘をあがって、おじいちゃんのお墓に、寄り道してから、帰るようになりました。

おじいちゃんと、石のぼうしの仲間たちは、毎日、いろんな海の話をしてくれました。それが、とても、おもしろいのです。見たこともない、ワクワク、ドキドキする話ばかりです。

はえなわ漁という、海に、長い長い縄を、はわせて、マグロをとる話。

大きなカジキマグロと、格闘した話。

百頭以上のイルカの群れに出会った話。

乗っていたマグロ船より、大きな鯨を見た

話

遠い遠い国の話……。

オサム君は、毎日、はやく話が聞きたくて、授業が終わると、裏口を飛び出して、丘をかけ上がります。

「スエズ運河とパナマ運河を通らんと、一人前じゃねえだっちゃ」

まるいぼうしが、得意げに言います。

「いんや、マゼラン海峡を通って一人前だ」
苔だらけのぼうしが、負けん気で言い返します。その態度に、まるいぼうしは、少しカチンとききました。

「ハハ、なにをえらそうに。アンタは、一年ぶりに、マグロ船、降りた日、かわいい女房のところへ、真っ直ぐに帰ればいいものを、稼いできた札束を、ズボンの両ポケットさ、つつこんで、魚町で、しこたま飲んで、明け方、海に、ドボクンと落ちて死んでしまったそうじゃないか。札と一緒に、プカプカ浮かんでたって聞いたづら。みっともねえ話だ、

海の男の風上にも置けねえ。かわいそうに、
アンタの女房は、家にひきこもって、毎日、
泣いて暮らしとった。津波が来た時、逃げる
気力もなかったのだろうさ。泣いたまんま、
家ごと流されて行方も知れねえ」

そこまで言って、まるいぼうしは、はっ、
としました。

「すまんかった、オラ、ちつと、言い過ぎた
だ……」

その時、後ろの方から、歌声が聞こえてき
ました。

「おーい、うるせえ、うるせえぞ！」

苔だらけのぼうしは、気まづい空気を、か
き消すかの様に、どなりました。

歌っているのは、少し後ろにある、お墓で
す。少し大きくて平べったいぼうしをかぶっ
ています。そのぼうしには、何か、長々と文
字が刻まれています。

「うるせえなあ、お前の歌は聞きあきたん

だ」

しかし、まあ、なかなか、よい声をしていきます。

「あいつはな、ちよつとした歌手だったんだ。あの平べったいぼうしに、自分のヒット曲の歌詞を刻んでいるのさ」

オサム君は、聞いたことがあるような、ないような歌です。

口が過ぎたことを、反省したばかりのまるいぼうしが、クククツ、と笑って、また、しやべりはじめました。

「歌手って言っても、ヒットしたのは、この歌だけべ。あとは、サツパリで、おマンマも食えなくなつて、泣く泣く、ふるさとに帰つてきたつてわけだっちゃ。いわゆる、一発屋つていうやつだ、クククツ」

苔だらけのぼうしは、また、深いため息をつきました。

「でもな、一曲だろうが、一発だろうが、いいじゃないか。時々、遠いところからでも、

ファンというやつらが、墓参りに来てくれる
つちゃ。自分が知らない人まで、来てくれる
んだぜ。幸せなこつちゃ。ああ、それなのに、
オレんところは、だーれも来てくれねえ。なあ、
カエルさんよお、オラの友達は、お前だけだ
つちゃ」

そのとき、石のカエルの目が、キョロツと
動きました。しかし、自分の頭の上なので、
苔だらけのぼうしは、気づきません。

※

キョロンコロンカロンコロン

小学校のチャイムがなりひびきます。

いつも静かなおじいさんが、今日は、なん
だか、そわそわしています。

オサム君の小学校は、明日、卒業式です。

オサム君は、卒業式で、在校生を代表して、
送辞を読むことになっています。その原稿を、
卒業式の前の今日、練習をかねて、おじいさ
んと、墓の仲間たちに、聞いてもらうことにな
っているのです。

おじいさんは、学校の方に目をやり、オサム君が来るのを、今か今かと待っています。自分が読むわけではないのに、何度も、咳ばらいをしています。

そのおじいさんのソワソワぶりがおかしくて、墓の仲間たちには、笑いをこらえています。

バサバサツ

突然、海猫たちが飛び立ちました。

その時です。

ドン！

突然、地面が、突きあがり落ちるような、強い衝撃がきました。そして、ユツサユツサと、激しく地面が揺れはじめました。

「地震だ！」 「地震だ！」

強い揺れです。長い揺れです。立ってられないほどです。

墓の者たちは、自分の石のぼうしを落とすまいと、必死に、ふんばります。

ぐわわわわーん、ぐわわわわーん！

「でかいぞ！」 「でかいぞ！」

ドカツ！ ドン、ドカ！

こらえ切れず、石のぼうしが次々と倒れて
行きます

ドカツ、ゴロゴロゴロツ

まるいぼうしも、耐え切れず、転がり落ち、
いくつかの墓を、ピンのように倒し、海にむ
かって、転がって行ってしまいました。

揺れは、くり返しやってきました。

「もう、かんべんしてくれー！」

苔だらけのぼうしが、半泣きして叫びまし
た。

すると、頭の上から突然、

「ガアーツ！」

大きな鳴き声がしました。

ぼうしの上の、白い石のカエルが、鳴いた
のです。

「ガアーツ、ガアーツ！」

かん高い、少し物悲しいような鳴き声です。苔だらけのぼうしは、ぎよっ、としました。そのかん高い鳴き声に、聞き覚えがあったからです。

「も、もしや、お前はっ?!」

海猫たちの群れは、高くのぼり、沖の方へ動き始めました。すると、海の水が、吸い込まれるように、沖へひいていくではありませんか。

「津波だ!津波が来るぞ!」

「ガア―!ガアガア―!」

苔だらけのぼうしとカエルと一緒に叫びました。

「津波だ!」 「津波だ!」

「津波だ!」 「津波だ!」

墓場じゅうの石たちが、一斉に叫びはじめました。

学校の校庭に、先生や生徒たちが、出てき

ていました。オサム君も、あの中にいるはず
です。

先生は、丘の裾を、ぐるっとまわった、ゆるやかな道を通って、避難しようとしていました。

「こつちへあがってこい！」

おじいちゃんは、優しい目を、鬼のように吊り上げて叫びました。

「あがってこい！」 「あがってこい！」

「あがってこい！」 「あがってこい！」

墓場じゅうの石たちが、いつせいに叫びはじめました。

その声は、校庭にいた、オサム君にも、届きました。

「丘をあがろう！」

先生が、叫びました。先生と生徒たちは、ゆるやかな裾の道ではなく、少しでも早く、高いところへ避難できる、急な道を、あがり始めました。

小さな生徒の手を、上級生が、にぎります。

そして、先生と生徒たちは、墓の手前の原っぱに、たどり着きました。オサム君もいます。

昔、来た大津波は、この辺までだったと聞いています。

しかし、おじいさんは、なおも、さげびました。

「もつと、あがれっ！」

海の向こうに、見たこともない大きさの、にごった海のかべが、せまってきたいました。

「もつと、あがれ！」 「もつと、あがれ！」

「もつと、あがれ！」 「もつと、あがれ！」

倒れた石も、転がった石も、叫び続けます。

「もつと、上まで行きましょう！」

先生が、呼びかけました。

生徒たちは、息を切らし、歯を食いしばり、そして助け合いながら、丘のさらなる上へと、かけあがりました。

そして、おばあちゃんの畑まで来ました。

「オサム！」

おばあちゃんが、かけよってきました。
オサム君は、おばあちゃんの腕に飛び込み
ました。

「おじいちゃんが、おじいちゃんが！」
おばあちゃんは、うんうんと、うなづきな
がら、オサム君を、力いっぱい抱きしめまし
た。

ゴゴゴゴゴ

地獄のような音がして、
校舎の時計が時を止めました。

※

おばあちゃんの家から見る海は、今日も、
きらきらと、穏やかに輝いています。

あの日のことは、悪い悪い夢だったので
ないかと思えるほど、おだやかな海です。
しかし、見おろせば、松林は消え、ガレキ
の荒野が広がっています。

学校の時計は、あの時間のまま、止まっ
ています。

こんなに美しい海が、あの日、あんなに恐

ろしい牙をむいたとは、今でも信じられませ
ん。

「ばあちゃん、僕、あの日、じいちゃんの声
を聞いたんだ。もっと逃げろ、もっと上さ逃
げろって、じいちゃんたちが言ったんだ」

おばあちゃんは、うんうん、とうなづくと、
墓を見下ろしました。

石のぼうしたちは、まだ、倒れたり、転が
ったりしたままです。

「おじいちゃん、オサムを守ってくれてあり
がとう、こどもたちを守ってくれてありがと
う」

おばあちゃんは、涙を流しました。

昔、大津波で、何もかもなくしたとき、こ
らえた涙が、時を越え、今、やっと、ポロポ
ロと、とめどなく流れてきたのです。

おばあちゃんの涙は、おじいちゃんのぼう
しに、ポタリと落ちました。

「おや、雨かな？」

おじいちゃんは、石のぼうしの仲間達と、
今日も海を見えています。

「海は悪くねえ」

苔だらけのぼうしが、つぶやきます。

「ケロツ」

ぼうしの上で、石のカエルが、返事をしました。

白い石のカエルは、苔だらけのぼうしの女房だったのです。

苔だらけのぼうしが、海に落ちて死んでから、女房は、泣き続けていました。そして、大津波で、家と一緒に流されてしまいました。が、その時、その姿をカエルに変え、愛する夫の墓へ跳んで来たのです。そして、石になり、ずっと、寄り添っていたのです。

苔だらけのぼうしは、ずっと、ひとりぼっちでは、なかったのです。

それが、わかってから、苔のぼうしは、すっかり、物静かな男になり、今は、おじいさんと同じ、優しい目だけを浮かべています。

「まるいぼうしは、どうしているかのう？」
まるいぼうしは、あの日、坂を、コロコロ
と転がって行ったままです。

どこかで、好きな野球をしているのでし
うか？それとも、アシカと遊んでいるのでし
ょうか？いえいえ、穴を三つ開けられ、ボー
リングの球になっているかもしれませぬ。

「また、なぐんにもなくなっちゃったただな」
苔だらけのぼうしがつぶやきました。

「大丈夫だ。あの子たちがいる」

おじいちゃんは、小学校に目をやりました。
「あの子たちが、この町の未来を、つくって
くれる」

おじいさんと墓の仲間たち

おばあちゃんとオサム君

みんな、海をみつめています

みんな、海と生きています

「おばあちゃん、僕、漁師になりたい」

オサム君が、おばあちゃんに言いました

止まっていた校舎の時計が、再び、時を刻
みはじめました